LK

直前講習

解答

Ｚ会東大進学教室

直前京大国語総合演習

【3 回目】

【問題】

【二】出典…木岡伸夫『習慣としての身体』／オリジナル問題

文章略解

道具としての対象は、所有できる。存在の潜在性において道具との相同性を持つ身体は、しかし、道具とはなりえない。それゆえ哲学者マルセルは、身体は所有できないとする。だが彼は同時に、自己の身体を、「絶対的な所有」であるとも述べる。「私」の身体は、不自由さ、他性をもって「私」に帰属し、「私」はその他性を契機に、他者へと開かれる。また、身体は、自他を超越した匿名的次元において、自由な動きを獲得する。つまり身体は、自己を、かつ自他を超越するという意味において、まさに、「絶対的」に所有されるのだが、マルセルによれば、それが可能となるのは、自他の身体が、相互主体的身体性の場に共属しているがゆえである。

解答

問1　私たちはふだん、自分の身体の存在を忘れていて、しかもその忘れているということ自体にも気づかず、身体を持っているという意識はまったくないのが一般的だ、ということを意味する。〔85字・解答例〕

問2　身体は、事物を自分の所有する道具として自由に扱うときにどうしても介在させなければならない有機体であって、その有機体自体を道具として扱うわけにはいかないから。〔78字・解答例〕

問3　私の身体は、私に帰属しながら私の自由にならない存在なので、その経験を通して、同じように私の自由にならない他者の存在も承認して、不自由さの中で共存していく世界が開かれてくる、ということ。〔92字・解答例〕

問4　身体は、他者の関与はもちろんのこと、自分で自由に操作しようとする意識さえも断って、完全に自然に任せた場において、本来ののびやかで自在な動きをする、ということ。〔79字・解答例〕

問5　私たちの身体は、もともと自他の区別もなくだれのものということもないまま、身体同士が互いに呼びあい答えあう関係が成立している空間の中で共存している、ということ。〔79字・解答例〕

解説

木岡伸夫（一九五一年生まれ）は、哲学・倫理学専修。出典の論文は、人間が身体を持って生きる（＝受肉）とはどういうことを意味しているか、という問題を追究した生命論である。問題文は、その初めのあたりから採ったもので、道具を持つことと比べながら、身体を持つことの特殊性を明らかにし、身体は他者の身体と人格的共振作用の生じる空間に開かれて存在する、と結んでいる。

この共同存在の場を木岡は「風土」と呼ぶ。風土には個人と集団を媒介する記号システムが働いていて、集団的想像力を各個人に浸透させて、ものの見方を強力に秩序づける。それを木岡は「型」と名付ける。個人は型をまなび身につけなければ集団の中で生きてゆけない。つまり型は主体に対して「普遍的な規範性」を持つ。しかしそれは、型を実践する主体の身体的特殊性を通してしか表現されないような普遍性なのだ。言わば「差異と不可分であるような同一性」だ、と言う。人は型なしでは生きられないが、同時に常に因襲的な型を切り開いて新しい「かたち」を身をもって発展的に表現していく――これが身体を持つ人間の生き方だ、と木岡は考えるのである。

だが現代は、電子メディアが飛躍的に発達し、情報のネットワークがグローバルに拡大すると同時に、それまで身体が拠（よ）っていた基盤＝風土の崩壊をももたらした。ということは伝統的な型の喪失をも意味する。安住できる母胎としての型がなくなるという危機的状況の中で、私たちはどのように生きてゆけばいいのか。木岡は、新たな市民的連帯の下に相互主体的なネットワークが新たな型を紡ぎ出す可能性に希望を託しているようだが、いずれにしても私たちはこれから「文字どおり身をもって状況を生き」つつ、答えてゆくしかないのである。

問1　「日常性」という言葉は、哲学用語としては、ハイデガーの存在論を始め、さまざまな立場から、改めて問い直すべき人間の存在の仕方として注目されているが、ここでも議論の出発点としてまず取り上げられている。とりあえず常識的に、「身体の日常性」とは、人間の身体のふだんのごく一般的なふつうのあり方、という意味に受けとめておこう。次の「忘却の事実そのものが忘却されている」というのは、その前の「それ（＝私の身体）を忘れていたという事実に気づく」、「その忘却を発見した」（9・10行目）と対照させた表現のようだ。だからここは、私が自分の身体の存在を忘れていて、しかもその忘れているということ自体にも気づいていない、ということを意味している。そして「気づくとき」「発見したとき」は、「私が〈私の身体〉を意識する」（8行目）、「私が身体と出会う」（9行目）というのだから、傍線部の場合は逆に、身体を持っているという意識はまったくないことになる。こ

こまでは身体と道具の共通点である。

問2　今度は身体と道具の相違点。傍線部に続いてマルセルの説明が紹介されているが、難解な上に「道具」という言葉が出てこない。だが、さいわい次の段落で「マルセルの考えでは」（16行目）と筆者が解釈してくれる。その中に「ここで彼が『所有』として捉えているのは、『自由に扱う』（……）ことのできるものである。それを『道具』と言いかえてもさしつかえあるまい」（17～19行目）とある。だから、傍線部の「身体はけっして道具とはなりえない」とは、身体は自分の所有する道具として自由に扱うことができない、ということなのだ。なぜ自由に扱えないのか。続いて「事物を自由に扱うには『有機体の介在』が必要だが（……）当の有機体を、意識主体である〈私〉は自由に扱うことができない」と説明されている。ここの「有機体」とは、「事物」に対して「身体」のことを言ったのであり、また「意識主体である〈私〉」とは、身体を切り離した意識だけの私のことであろう。そうするとここは、身体は私が事物を道具として自由に扱うときにどうしても介在させなければならない有機体であって、その有機体自体を道具として自由に扱うわけにはいかない、ということになる。

　このことを第四段落冒頭では「身体というものは、(1)あらゆる所有がそれにもとづくような根本的制約」であり、「そのゆえに(2)みずからは所有の対象とはなりえない」と表現している。さらにさかのぼってマルセル自身の言葉で言えば、「あらゆる所有は、私の身体に関連づけて（……）規定される。私の身体はすなわち、絶対的な所有であるがゆえに、いかなる意味でも所有であることを止めるものである」（13～15行目）ということになる。

問3　「〈私の身体〉が必然的にもつ他性」とは、文脈をさかのぼると、私の身体に伴う独特の「不自由さ」のこととわかる。具体的には**問2**で見たように、自分の所有する道具のように自由に扱うことはできない、ということだ。それでは身体は自分の所有物ではないのか。いや、「やはり『私の』身体として、私に帰属している」（28行目）。私の身体は私に帰属するものでありながら、私の自由にならない存在なのだ。そして、その「おかげで、私は他者存在に向かって開かれている」と傍線部は続く。これは、その後の「というのも」以降で説明されている。まず「他者とは私の自由にならない存在である」（30行目）と言う。それなら一切かかわりを持とうと思わないかというと、そうではない。「（他者は）自由に扱いたいという欲望をかきたてる」、「他者の存在は、自己身体の他性をつうじて承認され」る（30・31行目）。すでに私は、自由に扱いたいけれども自由にならない自分の身体というもの

を経験している。その経験を通して、同じように私の自由にならない他者の存在も承認することができるのだ。その結果、「人格的世界は、〈私の身体〉を通路として開かれてくる」（31・32行目）。「人格的世界（＝人間対人間の世界）」は、「道具的世界（＝人間対道具の世界）」と対照して言われたものだから、道具を思いのまま扱うのと違って、「微妙なある種の不自由さのうちにある」（32・33行目）。それでも「身体がつねに他者との共存（……）においてある」（27行目）という世界なのだ。

問4　傍線部は「受肉」という人間の生存の仕方について述べたもの。「受肉」とは、もともとはキリスト教で神の子イエスが人類を救うために地上に現れたことを、神のロゴスの受肉と表現したものだが、現代哲学では、人間を精神と肉体に分けないで、身体的存在として見る考え方を表す。その場合に、身体はどのようにはたらくというのか。まず、「自他の人称的区別を超えた」というのは、傍線部の直前の「匿名的主体性」を受けた表現で、〈私が〉とか〈彼が〉とかいう人称の別を超越している、ということ。「絶対的な自発性」とは、よそからの関与、命令などが一切なく、完全に身体自身で進んで動く、ということ。この場合の「よそ」には、「他」はもちろんのこと、「自」もまた含まれる。つまり、自分で「己れの身体を自由に操作しようとする意識」（37行目）さえもない、ということ、「（自分で）自由に処理することを断念して〈自然〉に任せ」る（37・38行目）ことである。そういう「地平」＝範囲・限られた場所において初めて「身体がはたらく」。この「はたらく」は、労働することではなく、本来の機能を発揮する・生き生きと動く、ということ。この段落の中の言葉を借りれば、「自在な動き」（38行目）、「のびやかなふるまい」（39行目）をする、ということであろう。

問5　「相互主体的身体性」などと言われるといかにも専門用語のようで、最初から降参してしまいたくなるかもしれない。事実、似たような「相互（間）主体（主観）性」とか「間身体性」といった哲学用語があるため、その意味を知っていれば参考になるかもしれないが、逆に先入観となって誤解のもとになる可能性もある。だが、筆者は「〈相互主体的身体性〉とでも呼べるような」という言い方をしている。つまり、既成の哲学用語を用いたのでなく、ここまで述べてきた身体の状態をまとめて表現したらこんな言い方になるかな、というのだから、解答はあくまでも文中の叙述から読み取れるはずだし、またそうすべきである。そこで、身体というものが置かれている状態という観点からこれまでの設問をふり返ってみると、身体はふだん自分のものと意識されていないし、意識して自由にしようとするとかえってぎこちなくなる。その意味では自分の身体と他者の身体と明確な区別があるわけで

はない。特別に意識しない限り、私たちの身体はもともと自他の区別もなく、だれのものということもない、あいまいな状態に置かれている、といったことがわかる。それでは身体には主体性というものがないのか。いや、35行目には「匿名的主体性」という言葉があった。それを傍線部では「相互主体的」と言い換えたものと考えられる。その〝だれということもなく相互に〟という状態は、傍線部の後の二文で説明されている。そこをまとめれば、身体同士が互いに呼びあい答えあう関係、ということになるだろう。ピンとこない人は、例えば何かの試合をみんなで応援している場面を想像してみよう。夢中になるにつれて、いつの間にか選手の身体とともに自分の身体も動いているような気分になり、また自分からかだれからか知らぬままにウェーブが起こって、その中に入っている。人間の身体同士というのはもともとそういう関係にあるのだが、大人になるにつれて脳で生きるようになるので、ふだんはあまり表面に出なくなるのだ。しかし赤ん坊のときは、だれでもこの「相互主体的身体性」をそのまま生きているはずだ。産院の育児室では、一人が泣き始めると他の新生児も次々に泣き出すという。あるいは、赤ん坊が自分の身体と母親の身体を区別できていないということもある。

最後に傍線部は、そのような「場に共属している」と結ばれている。私たちの身体は、そういう関係が成立している空間の中で共存している、というのである。

【配点の目安】 50点　**問1**　10点　**問2**　10点　**問3**　10点　**問4**　10点　**問5**　10点

問1

〈ア私たちはふだん、イ自分の身体の存在を忘れていて、ウしかもその忘れているということ自体にも気づかず、エ身体を持っているという意識はまったくないのが一般的だ、ということを意味する〉…10点

※ア1点　イ3点　ウ3点　エ3点

＊アは、身体の「ふだん」のあり方であることを説明すれば可

＊イは、「忘却の事実」の内容を説明すれば可

＊ウは、「忘却の事実そのものが忘却されている」について説明すれば可

＊エは、ウであることで「身体を持っているという意識はまったくない」ことを説明すれば可

問2

〈イ身体は、ア事物を自分の所有する道具として自由に扱うときに　イどうしても介在させなければならない有機体であって、ウその有機体自体を道具として扱うわけにはいかないから〉…10点

※ア3点　イ4点　ウ3点

＊アは、「自分の所有する自由に扱える事物」を「道具」としてとらえていることを説明すれば可

＊イは、「身体とは（事物を道具として扱うときに）介在させなければならない有機体である」と説明すれば可

＊ウは、「Aである身体＝有機体を道具として扱うわけにはいかない」と説明すれば可

問3

〈ア私の身体は、私に帰属しながら私の自由にならない存在なので、イその経験を通して、ウ同じように私の自由にならない他者の存在も承認して、エ不自由さの中で共存していく世界が開かれてくる、ということ〉…10点

※ア3点　イ1点　ウ3点　エ3点

＊アは、「〈私の身体〉が必然的にもつ他性」を説明すれば可

＊イ～エは、「他性のおかげで、私は他者存在に向かって開かれている」とはどのようなことかを説明すれば可

問4

〈身体は、ア他者の関与はもちろんのこと、イ自分で自由に操作しようとする意識さえも断って、ウ完全に自然に任せた場において、エ本来ののびやかで自在な動きをする、ということ〉…10点

※ア1点　イ3点　ウ3点　エ3点

＊ア～ウは、「自他の人称的区別を超えた絶対的な自発性の地平で」をわかりやすく説明すれば可

＊エは、「身体がはたらく」について説明すれば可

問5

〈私たちの身体は、**ア**もともと自他の区別もなく　**イ**だれのものということもないまま、**ウ**身体同士が互いに呼びあい答えあう関係が成立している**エ**空間の中で共存している、ということ〉…10点

※**ア**3点　**イ**3点　**ウ**3点　**エ**1点

＊**ア**～**イ**は、身体が置かれている状態を説明すれば可

＊**ウ**～**エ**は、「〈相互主体的身体性〉とでも呼べるような場に共属している」について説明すれば可

【二】 出典…松平定信『退閑雑記』巻之七 ／ オリジナル問題

現代語訳

「三斎の茶の湯に疑問がある」と堀式部が言った。「一つには天下に並ぶもののない風流だといって人々が高く評価している茶の湯には自己独自の工夫もあるべきなのに、何もかも利休のようにしているといって工夫が見られない」と言ったところ、三斎がおっしゃったことには、「昔の茶の湯の下手というのは、当今の上手よりすぐれていると心得ておくべきだ。（まして）昔の上手どもが吟味して碁盤の目盛りをつけるようにして道具もさまざまに置いてみて、これ以外はだめだと言ったということを、もしやったとしてもその年だけのもので、後にはすたれるものです。だから新しい工夫の出しようがないのです。だめだというのを理解できずに、目新しいやり方だと思うのは論外です」とおっしゃった。

まことに、その場かぎりの仕業であっても昔の人が心づかいをしたことといったら、実にきわだったものである。秀吉公の前で利休が、鶴の料理されるのを見て、「まな板がきまりよりは少し薄いにちがいない」と言った。料理する人に尋ねると、「あまり汚れたので上の方を少し削りました」と言ったのである。また、床の間の柱に花生けを掛ける釘をうつのに、大工を呼んで上げたり下げたりさまざまにしたけれどもどうしても気に合わず、やっとのことでその場所がよいと利休が言ったのだが、大工はあまりにめんどうに言うと思ったのだろうか、少し釘の先で柱に跡をつけて、まちがったふりをして釘を落とした。利休はまた前のように釘をあてさせて上げたり下げたりさまざまに注文した。日暮れになってもよしとは言わない。大工はあまり疲れたので、あの印をつけた跡へ釘を押し当てたところ、その場所こそ最上だと言ったという。このような詳細にわたって精通しているありさまだから、今の人の一時のたくらみなどは、さぞもののわかった人の笑いをかうだけのことであろう。

利休はいずれにしてもすぐれた気性を持っていた。田舎に住む人が茶器を買ってくれと金一両を送って、「これは長年心にかけてたくわえたものだ」と言ってやったら、麻布をたくさん買って届けた。「器物はあまり好まない方がいい。茶巾さえ新しければ、客はいくらでも招待できる」と言ってやったという。その他、千鳥の香炉を一万両で買って、「三つの足の一つが高さがそろっていない、私の気に合わない」と言って一分ほどすりへらさせた気性は、いずれにしても俗人の及ぶべきものではなかった。三斎にも、「茶人には淵と瀬とあって、水がたいそう澄みきったようであっても、底には泥やごみなどがあるのは淵だ。さらっと浅く見えてもどこまでも澄んでいるのは瀬だ。各人の心構えである」とおさとしになったという。

解答

問1　昔の茶道の名人たちが吟味して定めたやり方とは別に、後世の茶人が新たに独自の工夫を加えること。〔46字・解答例〕

問2　昔の名人がよくないと退けたやり方だということもわからずに、目新しいやり方だともてはやすのは論外です〔49字・解答例〕

問3　（イ）まな板の汚れを取るために表面を削ってわずかに薄くなったのを見抜いたり、柱に花生けを掛けるのに最適とした位置は二度試みて二度とも一致したというように、利休がものごとに微細にわたって精通していたこと。〔98字・解答例〕

（ロ）利休の眼力の精密さを示すことによって、第一段落の、利休が詳細に吟味して決めた茶の湯のやり方は動かしようがないとする三斎の発言を裏づけている。〔70字・解答例〕

問4　茶器や金銭にとらわれて心を濁すことなく、純粋に茶の湯一筋にうちこむ気性。〔36字・解答例〕

解説

松平定信（一七五八～一八二九）が幕府老中首座として行った寛政の改革は、日本史履修者は学習済みのことだろう。しかし彼は単なる政治屋ではなかった。歌人・国学者としても知られた父田安宗武の薫陶を受けて幼時から学問に励み歌を詠み、十二歳で最初の著書を著して以来、生涯に百数十冊の著述を行った文人でもあったのである。出典の『退閑雑記』は、一七九三年に老中職を退いて得た静かな生活を「退閑の御恵」と喜び、閑居の中でのさまざまな見聞を興にまかせてメモした雑記帳である。内容は文字どおり雑然としていてまとまりがないが、それがかえって人間定信のありのままの体臭を感じさせて、不思議な魅力ともなっている。

問題文は茶道について記した巻之七の一節だが、定信は当時の大茶人、松平不味（ふまい）（松江藩主）とも親交のあった数寄大名で、『茶事掟』『茶道訓』などの著書もある。だが彼はあくまでも武士としての立場を忘れず、茶道具などにこるぜいたくも戒めていた。これはかつて千利休の高弟の武将七人衆の一人であった細川三斎の茶道にも通ずるものである。三斎は、同僚の堀田正盛が御道具を拝見したいと望んだとき、あえて茶道具でなく武具を見せて、武士にとって御道具といえば武具の外にない、と言ったという。また、自分の茶を三斎流などともてはやす人がいるが、武門に生まれて茶道に名を残す必要はない、自分はただ利休のやり方を守っているだけだから利休流でいいのだ、と言ったとも伝えられている。同じ七人衆の一人、古田織部が作意・作分を強調して人々に強烈な印象を与えたのに対して、彼の茶は地味だと評されていた。問題文の前半はそのことにかかわる逸話である。

三斎にはまた、ひでりで百姓が餓死するのを救うために所蔵の天下の名器を売り払ったという逸話もある。問題文後半は、茶器など

にこだわるなというのは利休自身の教えだったということを述べたものである。定信も『花月草紙』の中で、利休所持の茶器などを集めて得意になっていたさる「やんごとなき人」の夢に利休が現れて、「一時の心やり」にすぎない茶の湯の道具に「おほくの財を尽してかいもとむるのはかなさ」を戒めた、という話を伝えている。出典の文章でも問題文の箇所につづいて、茶の湯のためにふくさがどうの着物がどうのと気にするようになったら「茶たつる事は禁ずべし」と断じている。まさに寛政の改革を思い出させる言葉である。

問1　「作分」という語はあまり一般的でないが、〈小作地・小作人〉という意味と、茶道用語としての意味がある。それを問題文から推測する設問。この語は第一段落で、傍線部も含めて三箇所に出てくる。最初は堀式部の言葉で、〝天下に並びなき数寄（＝風流）といわれる茶の湯なら「作分」があるべきなのに、何もかも利休のようにしているといって「作分」がない〟とある。次に三斎の言葉で〝昔の名人上手が吟味してこれ以外はよくないということを、もしやってもそのときだけのことで終わってしまうから、「作分」の出しようはない〟とある。以上の叙述から推測すると、利休のような昔の名人上手が定めた茶道の形式・作法をただまねるだけでなく、それとは別な自分独自のやり方を新たに打ち出すこと、という意味が読みとれよう。

問2　「あしきと云ふ」は、「むかしの上手ども吟味して……この外はあしきといふ」（3・4行目）を受けたもの。「で」は打消の接続助詞。「めづらし」は、目新しい、清新だ、というほめ言葉。昔の名人が否定したやり方を、新しいというだけでほめそやすのは「無下なり」、つまりお話にならない、あきれはてたひどいこと、最低のことだ、とつづく。三斎が堀式部に答えた言葉なので、丁寧語の「侍り」が使われている。

問3　（イ）「かうやうなる（＝このような）」は第二段落の利休の二つの逸話を受けたもの。「具体例に即して説明」するのだから、それらをうまくまとめる必要がある。

一つめの逸話は、鶴の「庖丁（＝料理）」で使っていたまな板が規定より少し薄いようだと指摘した話。料理人はまな板が汚れていたので表面を少し削ったのだった。そのごく微細な厚さの変化を利休は鋭く感じとったのである。二つめの話は、床の間の柱に掛ける花生けの位置のこと。「工匠（＝大工）」に命じて上げたり下げたりした末に、やっとそこがよいと決まった。ところが工匠はあまりめんどうなことを言う利休をひとつ試してやろうと考える。彼はよいと決まった位置にそっと釘で印をつけてから、わ

ざと釘を落としてもう一度利休に位置を決めさせてみたのである。今度もあれこれと上げ下げさせるので、疲れた工匠がさっきの位置にあてたら、すかさず利休はそこが一番いいと言った、という話である。微妙な位置の加減を利休の目は何度でも正確に見定めることができたのであろう。

二つの逸話に共通するのは利休の目測の驚くべき正確さだ。そのことを傍線部では「くはし（＝詳細である、精通している、微細なところまで行きとどいている）」という語で表現したのである。

（ロ）第一段落とのかかわりは傍線部につづく部分から読みとれる。利休の精密さに対して「いまの人の時の（＝その時だけの）作略」などは「知る人」が見れば笑われるだけだろうと言っている。その「いまの人の時の作略」が第一段落でいう後世の人の「作分」にあたる。「作分」というとよい意味の語だが（**問1**参照）、筆者は「作略（＝策略、たくらみ、自分を目立たせるためのはかりごと）」という悪い言葉にわざと変えている。三斎は、利休のような昔の名人が「碁盤の目をもる（＝目盛りをつける）」ように精細に吟味して決めたことはもう動かしようがない、と言った。それに対して筆者は、利休の目測がいかに精密であったかを示す実例をあげて、三斎の発言が単なる言いわけでなく真実であると実証したことになる。

問4　第三段落は第一・二段落とは違った面から利休の「すぐれたる気象」を紹介している。これを二つの逸話と三斎への教えから読みとる。

一つめの逸話は、茶器を買うために長い間かかって金をためた田舎の人に対して、そんなにまでして茶器などにこる必要はない、とさとした話。ところが二つめの逸話ではみずから一万両の香炉を買っている。ただし、その香炉の足の一本が長すぎて気に入らないとすり減らさせたという。「俗輩」なら一万両に目がくらんでとてもそんな思いきったことはできないが、利休は無頓着である。もし誤ってこわしたら、ああこわれたかと平気で捨ててしまうだろう。彼の気性は名器も一万両も超越している。それが問題文末尾でさとしている〝川瀬のように澄みきった心境〟であろう。たいていの人は表むき風流一筋のように見えても、茶器にこだわりその金額に心を乱す。それは「底には泥やあくたなどある」（19行目）淵のようなものだ、というのである。

【配点の目安】　50点　**問1**　10点　**問2**　8点　**問3**　（イ）12点　（ロ）8点　**問4**　12点

問1

〈ア昔の　イ茶道の　ウ名人たちが吟味して定めたやり方とは別に、エ後世の茶人が新たに　オ独自の工夫を加えること〉…10点

※ア1点　イ2点　ウ2点　エ1点　オ4点

＊イは、解答全体から、「作分」が〈茶道〉に関することである旨が伝われば可

＊エは、昔の茶道より〈新しい〉意が出れば可

問2

〈ア昔の名人が　イよくないと退けたやり方だということも　ウわからずに、エ目新しいやり方だともてはやすのは　オ論外です〉…8点

※ア1点　イ2点　ウ1点　エ2点　オ2点

＊アは、「あしきと云ふ」人が誰なのかを補って可

＊ウは、「で」を打消の接続助詞として訳出して可

＊エは、〈めづらし＝①賞美すべきだ・すばらしい　②まれだ・珍しい　③目新しい・清新だ〉①か③で訳したものが可

＊エ・オのどちらかで「侍る」の丁寧の意が出ていれば可

問3

（イ）〈アまな板の汚れを取るために表面を削ってわずかに薄くなったのを見抜いたり、イ柱に花生けを掛けるのに最適とした位置は二度試みて二度とも一致したというように、ウ利休がものごとに　エ微細にわたって精通していたこと〉…12点

※ア4点　イ4点　ウ2点　エ2点

＊アは、「かうやうなる」が指す一つめの逸話を説明して可

＊イは、「かうやうなる」が指す二つめの逸話を説明して可

＊エは、「くはしきこと」を説明して可

（ロ）〈ア利休の眼力の精密さを示すことによって、第一段落の、イ利休が詳細に吟味して決めた茶の湯のやり方は動かしようがないとする　ウ三斎の発言を裏づけている〉…8点

※ア3点　イ4点　ウ1点

＊アは、（イ）が意味するポイント（利休の目測の精密さ、物事の微細な点に精通していることなど）を押さえて可

＊イは、第一段落（三斎）の発言の内容を説明して可

＊ウは、アとイの関係を説明して可

問4

〈ア茶器や金銭にとらわれて心を濁すことなく、イ純粋に茶の湯一筋にうちこむ気性〉…12点

※ア6点　イ6点

＊アは、田舎の人が茶器を買おうとした話と、一万両の千鳥の香炉の話から、その言わんとするところを押さえて可

＊イは、〈純粋に茶の湯にうちこむ気性〉を説明して可

LK
直前京大国語総合演習
【3 回目】

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製